平成三年

日本思想史関係研究文献要目

凡例

一．本要目には、平成三年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。

一．本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一．右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録　Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。

ⅠⅡとも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道徳教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著者名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一．本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生があたった。

一．日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時間の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備な点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総雑

日本文化論（史学叢書七）　芳賀登　教育出版センター
日本思想史序説　岩崎允胤　新日本出版社
日本・中国の宗教文化の研究　酒井忠夫・福井文雄・山田利明編　平川出版社
王権の位相　松原正毅編　弘文堂
両墓制と他界観（日本歴史民俗叢書）　新谷尚紀　吉川弘文館
日本遊行宗教論（日本歴史民俗叢書）　真野俊和　〃
天皇制の政治思想史　岩間一雄　未来社
神道講座　一　神々の誕生と展開　下出積與・圭室文雄編　桜楓社
神道講座　二　神道の展開　〃　〃
大神神社史料—索引・年表　大神神社史料編修委員会編　吉川弘文館

古代

古代の祭式と思想—東アジアの中の日本（角川選書二一四）　中西進編　角川書店
律令制祭祀論考　菊地康明編　塙書房
古代日本人の外国観　井上秀雄　学生社
風土記の世界と日本の古代　永藤靖　大和書房
記紀神話と王権の祭り　水林彪　岩波書店
行基と古代仏教　中井真孝　永田文昌堂
奈良仏教と行基伝承の展開　根本誠二　雄山閣出版
日本古代信仰と仏教　堅田修　法蔵館
日本古代寺院史の研究　〃　〃
奈良朝山岳寺院の研究　逵日出典　名著出版
聖宝（人物叢書二〇二）　佐伯有清　吉川弘文館
日本霊異記の原像　平野邦雄編　東京女子大学古代史研究会著　角川書店
平安朝漢文学の開花—詩人空海と道真　川口久雄　吉川弘文館
源氏物語への道—物語文学の世界　〃　〃
王朝歴史物語の世界　山中裕編　〃
公卿補任年表　笠井昌昭編　山川出版社

中世

醍醐寺の密教と社会　稲垣栄三編　山喜房仏書林
鎌倉新仏教の研究　今井雅晴　吉川弘文館
一向一揆と真宗信仰（中世史研究選書）　神田千里　〃

親鸞・覚如・才市　新保哲　晃洋書房
臨済宗史　玉村竹二　春秋社
藤原定家の時代―中世文化の空間　五味文彦　岩波書店
武家文化と同朋衆―生活文化史論　村井康彦　三一書房
道元禅師全集　一　正法眼蔵上　鈴木格禅ほか編　河村孝道校注　春秋社

近世

思想史における近世　柴田純　思文閣出版
儒者姜沆と日本　辛基秀　明石書店
都市と田舎―日本文化外史（平凡社選書一三七）　村上恒夫　塚本学　平凡社
朱子学と反朱子学―日本における朱子学批判　山下龍二　研文社
徂徠学の世界　田原嗣郎　東京大学出版会
続山崎闇斎の研究　近藤啓吾　神道史学会
水戸の彰考館―その学問と成果　福田耕二郎　水戸史学会
実学史研究　七　論攷編　実学資料研究会編　思文閣出版
日中実学史研究　源了圓・末中哲夫編　〃
日本洋学史の研究　一〇（創元学術双書）　有坂隆道編　創元社
本居宣長　菅野覚明　ぺりかん社
近世和歌思想研究　渡部治　時潮社
江戸の兵学思想　野口武彦　中央公論社
河原巻物の世界　脇田修　東京大学出版会
近世の国家・社会と天皇　深谷克己　校倉書房
太宰春台転換期の経済思想　武部善人　御茶の水書房
日本の経済思想―江戸期から現在まで　テッサ・モーリス＝鈴木　藤井隆至訳　岩波書店
佐藤一斎全集　二・一一　岡田武彦監修　明徳出版社

近代

思想史の相貌―近代日本の思想家たち　西部邁　世界文化社
近代日本の思想像―啓蒙主義から超国家主義まで　井田輝敏　法律文化社
市場・道徳・秩序　坂本多加雄　創文社
明六社の人びと　戸沢行夫　築地書館
中村敬宇とキリスト教　小泉仰　北樹出版
教派神道の形成　井上順孝　弘文堂
西田哲学の研究―場所の論理の生成と構造　小坂国継　ミネルヴァ書房
近代日本の法学と法意識　熊谷開作　法律文化社
近代日本成立期の民衆運動　今西一　柏書房
初期社会主義史の研究―明治三〇年代の人と組織と運動　太田雅夫　新泉社

日本ファシズムと「国家改造」論　小松和生　世界書院
日本近代思想大系　一　開国　田中彰校注　岩波書店
日本近代思想大系　一三　歴史認識　田中彰・宮地正人校注　〃
日本近代思想大系　一五　翻訳の思想　加藤周一・丸山真男校注　〃
遠山茂樹著作集　一　明治維新・三　自由民権運動とその思想　〃
植木枝盛集　六・九・一〇　家永三郎ほか編　〃
未刊史料による日本出版文化　六（書誌書目シリーズ二六）　弥吉光長　ゆまに書房

補遺

近世

徳川イデオロギー　ヘルマン・オームス著　黒住真・清水正之・豊澤一・頼住光子訳　ぺりかん社
吉田松陰と松下村塾　海原徹　ミネルヴァ書房
海保青陵経済思想の研究　蔵並省自　雄山閣

近代

田辺哲学研究　氷見潔　北樹出版

Ⅱ　雑誌・紀要論文目録

総雑

超越的世界観の比較文化史的研究へのアプローチ　笠井昌昭　人文科学（同志社大人文科学研）一一
北方史研究の現状と課題―国家・境界・民族　菊地勇夫　歴史評論五〇〇
洋学資料による日本文化史の研究　四　吉備洋学資料研究会
梅原猛氏の日本人の「あの世」観論によせて　細川涼一　歴史評論四九〇
天神・地神・国神について　熊谷保孝　神道宗教一四三
中国宗教文化（特に符呪文化）の日本への伝播と受容　酒井忠夫　酒井忠夫・福井文雄・山田利明編『日本・中国の宗教文化の研究』（平河出版社）
童子神の変容―水蛭子から夷三郎殿へ　中村一基　研究年報（岩手大教育）五一

沖縄の祭祀と世界観―久高島の事例を通して　湧上元雄　日本民俗学一八六

神謡・神話の発生―宮古島狩俣を中心に　古橋信孝　現代詩手帖三四

「祭り」―金沢における祭礼と国家権力　ジェイムス・L・マックレイン　比較都市史研究会編『都市と共同体』（名著出版）

理想郷の伝承と歴史　赤田光男　社会科学（同志社大人文科学研）四七

国家像と民衆像―民族的偏見と差別の根を問う場として　大濱徹也　歴史人類一九

国制の比較史的研究のための枠組について　水林彪　歴史評論五〇四

古代

日本古代・中世思想における生命観　藤永芳純　田路慧編『人間と生命―生命観と生命倫理の研究』（西日本法規出版）

日本古代における「罪と罰」小考　佐々木文昭　印度哲学仏教学六

天津罪国津罪と祓と赦　時野谷滋　大倉山論集二九

日本人の生死観―古代を中心に　井上英治　人間学紀要二一

古代喪葬儀礼の変遷―天皇喪葬儀礼における吉凶意識の成立　渡部眞弓　神道宗教一四五

日本古代の陵墓観　中西康裕　古代文化四三―一

古代氏族と宗教（三）（共同研究）　日野昭他　紀要（竜谷大仏教文化研）二九

銭貨と呪力―日本古代銭貨の出土事例を中心として　栄原永遠男　人文研究（大阪市立大）四三―七

日本の聖水信仰―玉泉水受容具としての鏡、容器としての玉坏・緑釉陶器・青磁について　岡本明郎　菊地康明編『律令制祭祀論考』（塙書房）

日本古代の知識層と『老子』―〈河上公注〉の受容をめぐって　増尾伸一郎　研究紀要（豊田短大）一一

辛酉革命と甲子革令　斎藤実郎　紀要（日大芸術）二〇

神話の貧困（一）―『古事記』の神学的批判　村上一三　論集（京都産業大）二〇―二

古事記と日本書紀に於ける「喪」について―「殯」・「葬」との関連で　及川智早　国文学研究（早稲田大国文学会）一〇四

〝原帝紀〟成立の思想的背景―『帝紀』『旧辞』論序説　塚口義信　ヒストリア一三三

太安萬侶論―その家職と古事記撰録　阿久沢武史　芸文研究五九

古事記系譜部の意図―氏族〈始祖注記〉のありよう　多田元　国学院雑誌九二―一

危機意識としての古事記―絶対始原への意志と神祇令への違和（一）　工藤隆　紀要（大東文化大人文科学）二九

『古事記』下巻試論　矢嶋泉　日本文学四〇—四

古事記における「今」「於今」「至于今」と「顕」「顕於」「見於」の用法—古事記主要神の〝現在〟性、併せて高木神の登場理由　川副武胤　史学論集（就実女子大）六

古事記・墨江中王反乱伝承について　阿部誠　古事記年報三三

天照大御神の「見畏」　壬生幸子　〃

記紀神話の意匠—スサノオ神の八岐大蛇退治神話を中心として　瀧音能之　武光誠編『日本古代社会史研究』（同成社）

海幸山幸神話と伝承集団　橋本利光　日本文学論究五〇

「海宮訪問」と『経律異相』　瀬間正之　古事記年報三三

「記序」における元明天皇詔について　西宮一民　紀要（皇学館大）二九

日本書紀「一云」の史料的性格—古事記との近似例を中心として　金光スズ子　紀要（国学院大院文）二二

『日本書紀』神代巻冒頭部の構成　斎藤静隆　国学院雑誌九二—一

『日本書紀』の編纂と古代氏族　黛弘道　黛弘道編『古代国家の歴史と伝承』（吉川弘文館）

神功皇后伝承の一考察—国家幻想としての他界と母性　永藤靖　文芸研究（明治大文）六五

『出雲国風土記』浄阿書写説に関する疑問　藤本孝一　日本歴史五一三

風土記と天皇号　瀧音能之　瀧音能之編『律令国家の展開過程』（名著出版）

国引き考（上・下）　西郷信綱　月刊百科三四一・三四四

国引き神話と杖　菊地照夫　出雲古代史研究一

『出雲国風土記』の国引き神話　ジロー・ジャン・ピエール　言語文化論集（名古屋大総合言語センター）一二—二

「天降り」と「国造り」—出雲国風土記の世界観　駒木敏　国語と国文学六八—五

古代出雲の四大神　瀧音能之　古代文化四三—五

『常陸国風土記』の蛇神・雷神　永藤靖　文芸研究（明治大文）六六

東アジアと古代の日本—道教の問題を中心に　上田正昭　静岡県史研究八

崇る神—夜刀の神から三輪の神へ　神尾登喜子　人文科学（同志社大人文科学研）一一

天神・地祇・国神について　熊谷保孝　神道宗教一四三

丹生津比賣小考　門屋温　東洋の思想と宗教八

大雄命伝承の基盤と展開　福沢健　紀要（国学院大院文）二二

皇子と異教—菟道稚郎子伝承をめぐって　斎藤英喜　語文八一

律令制祭祀の特質　岡田精司　『律令制祭祀論考』
「神令」は祝詞である（上）　小山恵子　季刊日本思想史　三七
天神寿詞の性格　粕谷興紀　紀要（皇学館大神道研）　七
寿詞試論（上）（中）（下）　尾崎暢殃　学苑　六二二・六二三・六二五
公家と神社　森田悌・下出積与・圭室文雄編　『神道講座二神道の展開』（桜楓社）
後三条天皇と神祇信仰―とくに比叡山と日吉社を中心として―院政期神祇信仰史への序説　松本公一　人文科学（同志社大人文科学研）　一一
京の神―辻子の神・宗教　広川勝美　〃
仏教の受容をめぐって―物部氏の立場　熊谷康孝　政治経済誌学　三〇〇
日本古代における仏教受容の一考察　朝枝善照　印度学仏教学研究　四〇―一
薬師信仰の日本伝来について―比較文化史的視点から　松木裕美　栃木史学　五
僧尼と古代人　吉田一彦　寺院史研究　二
聖徳太子信仰の原点―救世観音像ならびに浄土・天寿国往生　夜久正雄　紀要（亜細亜大教養）　四三
聖徳太子の慧思禅師後身説について―史料P. ch. 3198を中心として　京戸慈光　天台学報　三三
藤原光明子と大般若経書写―『写経料紙帳』について　栄原永遠男　上田正昭編『古代の日本と東アジア』（小学館）
国分寺建立政策の基調　上川通夫　続日本紀研究　二七四
行基の民間布教について　御子柴大介　寺院史研究　二
藤原仲麻呂政権と仏教　宮崎健司　史学論究（大谷大）　四
奈良時代における禅院の機能と性格　三崎裕子　史論　四四
光仁・桓武朝の国家と仏教―早良親王と大安寺・東大寺　本郷真紹　仏教史学研究　三四―一
平城朝における仏教政策―大同元年一〇月五日勅について　入江哲史　人文論究（関西学院大）　四一―三
空海における五相成身観の構図　米田達也　日本思想史学　二三
空海の「声字実相」の世界　村上保壽　紀要（高野山大密教文化研）　四
『二教論』の含意と視座　佐藤昌紀　密教文化　一七五
弘法大師の戒律観　〃　〃
最澄の成仏観をめぐって　高佐宣長　仏教学　三〇
最澄と天台本覚思想の展開（一〇）　栗田勇　文芸　三〇―二
叡山大師時代の山王信仰　野本覚成　研究紀要（叡山学院）　一四
傳教大師における二乗作佛の問題―特に『守護國界章』を中心にして　桑谷祐顕　天台学報　三三
智證大師圓珍の「辟支佛」観について　白土わか　〃

智證大師圓珍の『辟支佛義集』をめぐって　白土わか　古代文化史論攷　一〇

慈覺大師圓仁の佛身観における一問題　水上文議　天台学報　三三

慈覚大師円仁と『慈覚大師伝』研究の歴史　小山田和夫　立正史学　六九

安然の佛身論の東密への影響　荒木正宏　天台学報　三三

中国・日本の密教における道教的要素　三崎良周　『日本・中国の宗教文化の研究』

太元帥法の請来とその展開—入唐根本大師常暁と第二阿闍梨寵寿　佐藤長門　史学研究集録　一六

白河院と仁和寺—修法からみる院政期の精神世界　栗本徳子　金沢文庫研究　二八六

子島寺真興の宗教的環境—摂関期南都系仏教の動向に関する一考察　追塩千尋　仏教史学研究　三四—二

平安時代の「家」と寺—藤原氏の極楽寺・勧修寺を中心として　京楽真帆子　日本史研究　三四六

聖徳太子墓の展開と叡福寺の成立　小野一之　日本史研究　三四二

『血盆経』と女人救済—〝血の池地獄の語り〟を中心として　高達奈緒美　国文学解釈と鑑賞　五六—五

日本史上の女性と仏教—女人救済説と女人成仏をめぐって　西口順子　〃

地蔵菩薩と女人救済—火印（頬焼）地蔵のこと　渡浩一　国文学解釈と鑑賞　五六—五

『法華経』・『無量寿経』・『転女成仏経』における女人救済　白土わか　〃

成尋阿闍梨母—篤信の女人の苦悩するところ　長崎健　〃

説教にみる女性と仏教　関山和夫　〃

『善光寺縁起』における女人救済の諸相　吉原浩人　〃

古典文学にみる竜女成仏　田中貴子　〃

日本古代律令国家と道教的信仰　和田萃　『律令制祭祀論考』

殺牛馬信仰に関する文献史料の再検討—日本古代の動物犠牲について　桜井秀雄　信濃　四四—四

陰陽道の史的発展　中村璋八　『日本・中国の宗教文化の研究』

神仏習合の神社の実態—吉田山神宮寺・大宝八幡宮・高田権現を例に　内山純子　茨城史林　一六

神仏習合の素地形成と発生期の諸現象—既存発生論への再検討を踏まえて　達日出典　芸林　四〇—四

護法善神から本地垂迹へ　宇佐美正利　『神道講座一神々の誕生と展開』

地方豪族と神社　浅香年木　〃

私祭から官祭へ	野尻　靖	『神道講座一神々の誕生と展開』	
いま一つの神仏習合	下出積與	〃	
平安時代の稲荷信仰と稲荷詣	黒田紘一郎	社会科学（同志社大人文科学研）四七	
修験道集団の世俗性	疋田精俊	研究紀要（大正大仏教学・文学）七六	
平安中期貴族社会における陰陽師―とくに病気をめぐる活動について	繁田信一	論集（東北大印度学宗教学会）一八	
日・中・印三国古典における神話・叙事詩・歴史の展開について	夜久正雄	紀要（亜細亜大アジア研）一八	
遣新羅使歌の百済系の歌主と八幡神（上）―豊前の浜の漂流船	高橋庄次	上代文学　六六	
〈君が手馴れの琴〉考―長屋王の変前後の文人貴族と琴康	増尾伸一郎	史潮　二九	
『霊異記』にみえる「寺」の存在形態	有富由紀子	平野邦雄編『日本霊異記の原像』（角川書店）	
『霊異記』にみえる病と看病	三崎裕子	〃	
『霊異記』にみえる盗み・遺失物をめぐる諸問題	勝浦令子	〃	
『霊異記』における僧侶の呼称	熊倉千鶴子	〃	
揺籃期の「家」―『日本霊異記』の説話にみえる「家」の構造モデル	太田愛之	社会経済史学　五七―四	
和光同塵・上代高僧伝の思想―『日本霊異記』行基物語化の背景	蔵中しのぶ	上代文学　六六	
日本霊異記上巻第五話と日本書紀	水野柳太郎	奈良史学　九	
『日本霊異記』における聖武天皇	八重樫直比古	日本思想史学　二三	
『日本国現報善悪霊異記』冒頭三話考―水を掌るもの	藪　敏晴	国学院雑誌　九二―二	
日本霊異記と中国仏教―下巻第三八縁をめぐって	山口敦史	〃	
玄賓の隠逸性について	松田智弘	国史学研究　一七	
家伝・国史・説話―数種の『百川伝』から	加藤静子	紀要（相模女子大人文・社会）五四	
『源氏物語』と歴史意識―冷泉院をめぐって	篠原昭二	紀要（東京大教養国文学・人文科学・漢文学）二五	
すずろなる時空―『宇津保物語』の史的背景	飯沼清子	山中裕編『王朝歴史物語の世界』（吉川弘文館）	
『栄華物語』の歴史意識	池田尚隆	〃	
『栄華物語』と史実	中村康夫	〃	
聖なる仏教者藤原道長―『栄華物語』の仏教思想の一側面	曽根正人	〃	

歴史叙述の源流としての記紀　神野志隆光　山中裕編『王朝歴史物語の世界』（吉川弘文館）

歴史物語への志向　五味文彦　〃

歴史叙述としての説話集―故実と歴史叙述のメカニズム　伊東玉美　〃

『大鏡』の虚構と史実　石川徹　国語と国文学　六八―二

『拾遺往生伝』にみる女性観小考　下出積與　古代文化　四四―五

今昔物語集の往生観―本朝部を中心として　田村敏紀　国文学論叢三六

「大嘗」の成立　大平聡　研究年報（宮城学院女子大基督教文化研）二四

大嘗祭の本義―八世紀のVerfassungまたは原天皇制についての一考察　水林彪　法律時報　六三―七

大嘗祭・神今食の祭神　森田悌　教科教育研究（金沢大教育）二七

古代皇位継承儀礼研究の最新動向をめぐる一考察―岡田荘司氏論文「大嘗祭"真床覆衾"論と寝座の意味」を中心に　榎村寛之　歴史評論四八九

アマツヒツギとヲスクニ―天皇の二面性と即位儀礼　脊古真哉　文研会紀要（愛知学院大文）二

四神旗をめぐる思想像　新川登亀男　『神道講座―神々の誕生と展開』

平安時代における剣璽渡御儀礼　加茂正典　研究紀要（京都精華学園）二九

古代祭祀と天皇　中村英重　『律令国家の展開過程』

律令期直前の祭祀　椙山林継　『律令制祭祀論考』

神祇制度　根本誠二　『神道講座―神々の誕生と展開』

神祇令の成立　柴田博子　研究年報（奈良女子大文）三四

「因循」について―日本律令制定の正当化に関する考察　小林宏　国学院法学　二八―三

律令国家と村落祭祀　矢野建一　『律令制祭祀論考』

春日神社と律令官社制　菊地康明　〃

隼人と宇佐と石清水　野尻靖　『律令国家の展開過程』

禁河宮川小考―神宮祭祀と朝廷祭祀の境界　小松馨　大倉山論集二九

内侍所神鏡奉斎考　渡部眞弓　国学院雑誌　九二―三

天下（四方）大祓の成立と公民意識　矢野建一　歴史学研究　六二〇

『伊吉連博徳書』　加茂正典　国書逸文研究　二四

皇位の継承儀礼—『北山抄』を中心に　所　功　国文学解釈と鑑賞　五六—二

『北山抄』逸文補遺・覚書　所　功　国書逸文研究　二四

文章得業生試の成立　古藤真平　史林　七四—二

平安中期貴族の法意識の一側面—『小右記』を素材とする考察　龍福義友　山中裕編『摂関時代と古記録』（吉川弘文館）

平安時代中期の貴族の奢侈観　西村さとみ　年報（奈良女子大人間文化研）　六

吉備真備について　末澤又彦　秋田論叢（秋田経法大法）　七

久木幸男著『日本古代学校の研究』　荒井明夫・駒込武・高川重一・村橋陽　研究室紀要（東京大教育哲学・教育史）　一七

補遺

遷都の神祇祭祀におよぼす影響について　脊古真哉　歴史地理学会編『変革期の歴史地理』（古今書院）

中世

『愚管抄』における「漢家」と「日本国」　大隅和雄　史論　四四

歴史物語の終焉—『増鏡』における文体の危機について　渡瀬茂　日本文学　四〇—六

『増鏡』と両統問題　福田景道　紀要（島根大教育人文・社会）　二五

『神皇正統記』と『職原抄』　時野谷滋　神道史研究　三九—三

『源平盛衰記』の年代記的性格—鹿谷事件発端部に至る叙述の検討を通して　源健一郎　人文論究　四一—三

『太閤記』は史学に益あり　山室恭子　石井進編『中世をひろげる—新しい史料論をもとめて』（吉川弘文館）

法然上人における選択思想と助業観の展開　安達俊英　〃　一七

法然の没後遺誡文について—遺文としての信憑性攷　中野正明　〃

「一期物語」第二〇話をめぐって—醍醐本『法然上人伝記』研究　梶村昇　〃

熊谷入道蓮生の信仰と法然浄土教　亀山純生　人間と社会（東京農工大）　二

中世初期東国武士の生活意識と精神の再構成—熊谷直美を中心に　〃　紀要（東京農工大一般教育）　二七

中世における浄土宗寺院成立の諸相　玉山成元　日本仏教史学　二五

親鸞思想における罪悪観の研究　福島美和子　真宗学　八三

親鸞における宿業と自由の問題　松岡茂生　哲学と教育三八
親鸞にとっての『興福寺奏状』　一楽真　真宗研究　三五
親鸞教学における弾圧の意味（下）　広瀬杲　親鸞教学　五八
親鸞における祖師観形成の問題　川添泰信　真宗学　八四
親鸞の神祇観をめぐる諸問題　藤村研之　仏教史研究二八
親鸞の神祇観—自他の上に証される真宗と社会通念の相克（一）　本多静芳　紀要（武蔵野女子大）二六
親鸞の一切経校合参加と肉食の説話について　山田雅教　高田学報　八〇
『歎異抄』における親鸞と唯円　森章司　大倉山論集　二九
親鸞伝と夢　寺川幽芳　真宗学　八四
常陸大山の親鸞と真宗門徒　今井雅晴　茨城県史研究　六七
「恵信尼書状」私論　西口順子　史窓　四八
覚如の親鸞像と本願寺—『報恩講式』を中心として　新保哲　研究年報（大倉山文化会議）二
真宗歴代における祖師観形成の問題—覚如を中心として　川添泰信　真宗研究　三五
常楽台存覚の周辺と南北朝期の常陸国北部の浄土真宗門徒—『存覚一期記』、『存覚袖日記』を素材として　堤禎子　茨城県立歴史館報　一八
了誉聖冏の生涯　玉山成元　年報（三康文化研）二三
酉誉聖聰について　玉山成元　仏教文化研究　三五
聖聰上人の著作について—聖聰伝記載の著作と前期の著作考　大谷旭雄　〃
聖聰の浄土教学における一特徴—「聖浄二門」説に対する聖冏と聖聰のとりくみ　籐堂恭俊　〃
北陸における蓮如教団の展開について—白山加賀場を中心として　忍関崇　仏教史研究二八
真宗教団における礼拝対象の推移　千葉乗隆　龍谷史壇　九八
道元の言語表現—「将錯就錯」　春日佑芳　日本思想史学　二三
道元の「光明」　毛利豊史　〃
道元と生死—可死可思　川口雅之　倫理学年報四〇
宗教体験を貫く〈出来事〉—道元を手掛かりとして　黒木幹夫　紀要（愛媛大教養）二三—一
道元禅師と叡山教学（三）—只管打座と即心是仏の一如的展開　守屋茂　宗学研究　三三
「仏性」巻撰述事情考　袴谷憲昭　〃
三教一致をめぐる道元と如浄の立場　沈京　〃
道元禅師と聖ボナヴェントゥラにおける知恵—比較思想的研究　笠井貞　〃

自然批判としての仏教　袴谷憲昭　論集（駒沢大仏教）二一

日本禅宗史の研究―越後における中世禅宗教団の展開　竹内道雄　紀要（愛知学院大禅研）一八・一九

初期永平寺僧団の問題点　中尾良信　〃

『守護国家論』に見られる日蓮聖人の浄土観　笹津海道　紀要（日蓮教学研）一八

日蓮聖人の釈尊観　松代邦義　〃

日蓮聖人の法華経観―道元禅師との比較を通して　平井智親　〃

日蓮聖人の上行菩薩自覚　渡辺彰良　〃

日蓮上人の「病」に関する説示について　野口真澄　紀要（日蓮教学研）一八

日蓮の真言宗批判の仏教史的意味　佐々木馨　新野直吉・諸戸立雄両教授退官記念会編『中国史と西洋社会の展開』（みしま書房）

日蓮と極楽寺流北条氏　川添昭二　法華　七七―九

日蓮と平頼綱　〃　法華七七―一〇

平頼綱とその周辺の信仰　今井雅晴　仏教史学研究　三四―二

一遍と神祇　橘俊道　『神道講座二　神道の展開』

聖道諸教考　小妻典文　真宗研究　三五

正像末三時思想について　福原蓮月　天台学報　三三

誣真の禅宗批判について　佐々木俊道　宗学研究　三三

『興福寺奏状』についての一考察　城福雅伸　仏教学研究四七

中世南都仏教の舎利信仰　冨村孝文　紀要（琉球大法文理学）史学・地　三四

笠置上人貞慶に関する新出史料四種　高橋秀英　金沢文庫研究　二八六

明恵と仏光三昧観（一）―実践観から見たその受容の理由及び背景　柴崎照和　南都仏教　六五

良遍の浄土教思想に関する一考察　楠淳證　論集（龍谷大）四三八

九条兼実の仏教信仰―護持僧実厳と尊勝念誦・愛染王供養　吉井克信　研究紀要（大谷大院）八

慈円の周縁―付『華頂要略門主伝』（慈円の項）人名索引　石川一　紀要（広島女子大文）二六

『宝物集』に見る報恩院憲深―鎌倉中期における醍醐寺の一断面　林文子　稲垣栄三編『醍醐寺の密教と社会』（山喜房仏書林）

黒衣の僧について―鎌倉・南北朝期における遁世の一側面　林譲　小川信先生古希記念会編『日本中世政治社会の研究』（続群書類従完成会）

中世西大寺流の宗教構造　上川通夫　立命館文学　五二一

中世寺院の構造と国家　〃　日本史研究　三四四

「院家」と「法流」　永村　真　『醍醐寺の密教と社会』

中世東大寺と聖武天皇　久野修義　仏教史学研究　三四―一

『行基年譜』に関する二つの問題　森　明彦　有坂隆道先生古希記念会編『日本文化史論集』（同朋舎出版）

外法と愛法の中世―吒天行者の肖像　田中貴子　日本文学　四〇―六

玄旨帰命壇の本質と愛色の思想―特に玄旨壇の堂内荘厳を通して　浅田正博　大倉山論集二九

玄旨灌頂の成立と流伝　野本覚成　天台学報　三三

石動山の信仰と絵図―石動山古絵図の作製時期に関するノート　松井吉昭　瀧澤武雄編『中近世史の史料と方法』（東京堂出版）

法華経直談の周辺資料・真福寺蔵「法華経注抄」―残篇をめぐって―附、西教寺蔵「北林名目」他　牧野和夫　実践国文学三九

〃

安居院流唱導と「母恩勝父恩事」―附、「因縁」、止観談義周辺史料の二、三について　〃　実践国文学四〇

中世における神宮仮殿遷宮（下）　鎌田純一　大倉山論集三〇

吉田神道における亀卜研究について―宣賢・賢右筆『亀卜伝』、賢右筆『亀卜次第并祭文』を中心として　出村勝明　神道史研究　三九―二

中世日本の神道と道教―吉田神道における『太上玄霊北斗本命延生真経』の受容　坂出祥伸　『日本・中国の宗教文化の研究』

『津守氏古系図』の研究―生きた神仏習合史　増尾伸一郎　国学院雑誌　九二―五

神話と呪物の構想力―中世伊勢神宮の隠された神をめぐって　嵯峨井　健　思想　八〇七

中世寺院における縁起の形成とその背景―泰澄伝承と越前国越知山をめぐって　山本ひろ子　研究報告（徳島県立博）　一

讃岐志度寺縁起と長谷寺縁起　長谷川賢二　日本仏教史学　二五

『日光山縁起』と東国の「仏教」　逵　日出典　文芸研究一二八

『諏訪大明神画詞』試論―殺生観をめぐって　曽根原　理　日本思想史研究　二三

諏訪本地の諸問題　吉原健雄　紀要（宮崎大教育人文科学）　七〇

女性蔑視観の庶民層への定着に関する一試論　白石一美　日本仏教史学　二五

愛別離苦を超えて―『平家物語』における女性と仏教　澤　博勝　国文学解釈と鑑賞　五六―五

藤原俊成の法華経廿八品歌の詠法をめぐって　平野さつき　国文学研究　一〇四

『沙石集』における天台　姫野希美　天台学報　三三

『徒然草』と『一言芳談』にみる仏道観　渡辺守順　研究年報（松ヶ岡文庫）　五

新保　哲

『太平記』終結部の諸相―「光厳院行脚の事」をめぐって　長坂成行　日本文学四〇―六

太平記から三国伝記へ―朴王天竺震旦物語をめぐって　黒田彰　日本文学四〇―六

禅竹の六輪一露と色心不二　三崎義泉　天台学報三三

謡曲『第六天』と解脱房貞慶―貞慶の伊勢参宮説話と第六天魔王　細川涼一　金沢文庫研究二八七

擬制の芸能―メタ芸能としての『自然居士』　鳥居明雄　日本文学四〇―六

二つの『さゝめごと』―「えんなる歌人（歌仙）」をめぐって　菅基久子　文芸研究一二八

異形の聖徳太子　武田佐知子　歴史評論四九三

聖徳太子像と後醍醐天皇―勝鬘経講讃図の異形性をめぐって　〃　アジア学論叢一

『蒙古襲来絵詞』の歴史資料としての価値　清水久夫　法政史学四三

石清水八幡宮と芸能　石黒吉次郎　人文科学年報（専修大人文科学研）二一

修正鬼会と国東六郷満山　飯沼賢司　『大系日本歴史と芸能』三（平凡社）

中世の五節供と天皇制　井原今朝男　歴史学研究六二〇

武士―承久の乱の観念的意義について　本郷和人　日本歴史五一三

初期足利政権と北野信仰―太平記と梅松論を素材として　八木聖弥　文化史学四七

足利義持と観音懺法そして「朝長」　松岡心平　紀要（東京大教養人文科学・国文学・漢文学）二五

織田信長の自己神格化と津嶋牛頭天王　赤木妙子　史学六〇―一

日本中世における家族と家族イデオロギー　西尾和美　ヒストリア一三三

五味文彦著『吾妻鏡の方法―事実と神話にみる中世』　古澤直人　史学雑誌一〇〇―七

今谷明著『室町の王権―足利義満の王権簒奪計画』　岩元宗一　九州史学一〇一

白山芳太郎著『北畠親房の研究』　深津睦夫　皇学館史学四・五

奈倉哲三著『真宗信仰の思想史的研究―越後蒲原門徒の思想と行動』　小沢浩　歴史評論四九七

近世

実学史研究の一視角　杉本勲　源了圓・末中哲夫編『日中実学史研究』（思文閣出版）

「実学」の形成と地域の特性―江戸・京都・大坂を軸とする　末中哲夫　〃

開明思想としての実学　源了圓　〃

林羅山の『老子口義』受容　大野出　日本思想史学　二三
林羅山『野槌』における仏老批判　〃　中国哲学　二〇
弘文院学士号の成立と林鵞峰　高橋章則　日本語学科論集（東北大文）一
徳川政権の正当性に関する熊沢蕃山の見解―『集義和書』の研究（二）　高田豊實　社会科学論集（名古屋経済大・市邨学園短大）五一
熊沢蕃山の「子育て」像　池田仁子　日本歴史五一八
山鹿素行の士道論　広神清　倫理学　九
『中朝事実』における「臣」　中山広司　日本歴史五一九
『中朝事実』に於けるわが国の尊称と書名についての一考察　〃　芸林　四〇―一
中村惕斎の仏教批判　高橋文博　『日本倫理思想史の基礎資料に関する総合的研究』（東京大文）
伊藤仁斎における「古義学」的方法の形成過程―『孟子古義』諸稿本における「至大至剛」の解釈をめぐって　丸谷晃一　政治経済史学　三〇〇
伊藤仁斎の初期思想―書誌学的視点から　清水徹　フィロソフィア　七八
仁斎と古義堂サークル　野々村勝英　日本学　一七
古義堂文庫蔵『初見帳』（六）　伊藤東涯　山根陸宏　岸本眞美　ビブリア　九六
「鬼神」と「理」―三宅尚斎『祭祀来格説』をめぐって　子安宣邦　思想　八〇九
新井白石の「日本国王」復号論　関徳基　瀧澤武雄編『中近世の史料と方法』（東京堂出版）
雨森芳洲と「交隣須知」　福島邦道　実践国文学三九
対馬藩の朝鮮通詞と雨森芳洲　米谷均　海事史研究四八
安井真祐の仏教批判―「非火葬論」を中心に　高橋文博　日本思想史学　二三
書を読むは書を看るに如かず―荻生徂徠と儒家言語論　宇野田尚哉　思想　八〇九
三浦梅園の道徳論　壷井秀生　梅園学会報一四
三浦梅園の天命論　〃　一五
大坂文化の社会的基盤とその変動―浪華の学問の伝統とその変質を中心として　芳賀登　歴史研究（大阪教育大歴史学研究室）一八
近世市井の歴史的言説―富永仲基と『日本春秋』をめぐって　宮川康子　思想　八〇九
懐徳堂の人々（七）中井履軒　山中浩之　懐徳　六〇
中井履軒撰の『三国志雕題』と『三国志雕題草本』について　矢羽野隆男　〃
懐徳親知―広瀬蒙斎『有方録』抄　水田紀久　〃
『雙玉樓帖』遺聞―柴野栗山をめぐる人々　阿河準三　芸林　四〇―三

尾藤二洲の学問観・教育観（書簡研究）　石津靖大　紀要（女子聖学院短大）二三

海保青陵の交遊—青陵像再構成への試み　八木清治　紀要（福岡女学院大）一

佐藤信淵の「重商主義」思想・再考—「経世済民」論から「神道」・「軍学」論へ　矢嶋道文　西川純子・高浦忠彦編『近代化の国際比較』（世界書院）

佐藤一斎の思想と教育　山縣明人　政治経済史学　三〇〇

『言志四録』における思想的戦略の変容　〃

一斎学の系譜　田中佩刀　『陽明学』（二松学舎大陽明学研）三

『愛日楼文詩』の考察—あるる大名により結ばれた一斎像　中村安宏　〃

佐藤一斎の「公平之心」　〃　日本思想史研究　二三

〔翻刻〕安積艮斎の海防論『新論』欄外評・『籌海披沙』草稿（一）　荻生茂博　米沢史学　七

史蹟をめぐる歴史意識—一九世紀前期の歴史と文化　羽賀祥二　日本史研究　三五一

再び『大日本史』の続編計画をめぐって—飯田瑞穂氏の批判に答える　鈴木暎一　茨城県史研究　六六

勝海舟と横井小楠—公議政治を目指す二つの道　マリオン・ウィリアム・ステイール（高山芳樹訳）　季刊日本思想史　三七

福井藩「挙藩上洛計画」にみる横井小楠の「公議論」基調　三上一夫　季刊日本思想史　三七

横井小楠における学問・教育・政治—「講学」と公議・公論思想の形成の問題をめぐって　源了圓　〃

社会改革と実学—横井小楠の総合大観　山崎益吉　『日中実学史研究』

横井小楠における学問方法の歴史的位相　楢原孝俊　政治研究　三八

橋本左内と横井小楠の露・英観—両者の外交観の異同性を中心に　三上一夫　熊本近代史研編・発行『近代における熊本・日本・アジア』

日本主義儒学の奉公倫理道徳と論理—吉田松陰の尊皇討幕論と忠諫思想　李秀石　日本歴史五二三

吉田松陰の忠の思想　東中野修道　日本思想史学　二三

『東北遊日記』に見たる吉田松陰の意識と行動　鐘ヶ江一宏　政治経済史学　三〇〇

吉田松陰の水野忠央観　山口宗之　熊野誌　三七

山田武甫—熊本実学派の人びと　花立三郎　季刊日本思想史　三七

山田顕義の国体意識と行動　山本哲生　紀要（日本大精神文化研）二二

山田顕義の元服前教育に関する研究—山田顕義の教育理念の源流　長江弘晃　〃

中日儒教文化の構造と変容—儒教文化と中日近代化　王鉄橋　国際関係学研究（東京国際大）四
「和」の倫理—「和魂」と外来文化の受容　円増治之　紀要（長野大）一三—一
蘭学と実学　吉田忠　『日中実学史研究』
生活思想としての実学—西川如見の場合　藤原暹　『実学史研究』Ⅶ（思文閣出版）
西学と儒教的実学の接点—三浦梅園と洪大容を中心として　小川晴久　『日中実学史研究』
杉田玄白の社会観—『後見草』『野叟独語』を中心に　山崎彰　『日本洋学史の研究』X
絵から言葉へ—司馬江漢からH・ドゥーフまで　松田清　『日中実学史研究』
ケンペル『鎖国論』写本を読み継いだ人々　井田清子　思想　八〇〇
桂川甫周『魯西亜封域図』について　吉田厚子　洋学史研究　八
『捕影問答』にみる大槻玄沢の対外認識—オランダ情報との関連において　生田澄江　法政史論　一八
十八世紀後期における「解剖」の言説の位相　松村浩二　懐徳　六〇
北辰のロマン派—和田家史料群の西欧文化　原田実　紀要（昭和薬科大）二五
蘭学者の長崎遊学と海外情報—柴田方庵の遊学日記を事例として　沼倉延幸　日蘭学会会誌　一六—一
緒方洪庵の西洋医学知識のヨーロッパにおける学統について　石田純郎　洋学資料による日本文化の研究　四
「ゼオガラヒー」から『海国図志』へ—舶載書籍による西欧政治制度紹介　宮地哉恵子　歴史学研究　六二三
補論「南部藩英学の濫觴」　藤原暹　岩手史学研究　七四
『祝詞考』の成立をめぐって　本澤雅史　紀要（皇学館大神道研）七
本居宣長に関する一考察—幕府の「相対化」と「さかしら」の排除　吉田昌彦　日本歴史五一四
本居宣長における死生観と「家」意識　鈴木暎一　社会文化史学　二八
『排蘆小船』述作の由来と成立　高橋俊和　国語国文　六〇—三
「源氏物語玉の小櫛」の出版事情（一）本居宣長と松平康定との関係・交流　岡田千昭　紀要（愛知学院大教養）三九—二
富士谷御杖の神話解釈　山田隆信　日本文学　四〇—一〇
平田篤胤学派の社会構造論　イサム・R・ハムザ　日本思想史学　二三
平田国学への一視点—そのナショナリズムの特質をめぐって　その二　阿部茂　研究報告（山梨大教育）四一
詩学と解釈学の間—橘守部の思想　スーザン・L・バーンズ　思想　八〇九
大国隆正における初期の思想形成　松浦光修　皇学館史学　四・五

幕末国学の転回と鈴木雅之の思想　桂島宣弘　立命館文学五二一

維新期の国学における共通教化の析出—鈴木雅之の教育・教化論　高橋陽一　日本の教育史学三四

近世神道—儒家神道を中心として　芳賀登　下出積與・圭室文雄編『神道講座二　神道の展開』（桜楓社）

松岡雄淵と吉田家『垂加翁門人系図』一紙の分析より　矢崎浩之　神道学一五一

近世神道思想研究—増穂残口の神像論　田辺建治郎　紀要（国学院大院文）二二

杉浦国頭の葬儀—近世中葉における神道葬祭式再編の一例として　椙山林継　紀要（国学院大日本文化研）六七

今出河如雞と村井古道再論　白井伊左牟　神道史研究三九—三

復古神道における〈出雲〉（上）（下）—思想史の一つの試みとして　原武史　思想八〇九・八一〇

六人部是香の幽冥観に関する一考察—特に『大無量寿経』との関連をめぐって　三輪和平　神道史研究三九—二

白川家と江戸の門人—天保年間の井上正鐵遠島をめぐって　荻原稔　神道宗教一四三

岡熊臣の神道史観・神職像—『神職暦運考』を中心に　武田秀章　紀要（国学院大日本文化研）六八

真木和泉守観即位礼記と其の後　小川常人　神道史研究三九—一

近世・近代における記紀解釈—神話と合理主義　磯前順一　宗教研究二九〇

実学としての教育　石附実　『日中実学史研究』

江戸時代における手習の教育的意義　利根啓三郎　紀要（東京家政学院大）三一

農民と昌益—農民は昌益をなぜ「守農太神」に祀ったか　柴田次雄　新野直吉・諸戸立雄両教授退官記念会編『中国史と西洋世界の展開』（みしま書房）

尊徳研究ノート—四—天道と人道『万物発言集』を中心として　多田顕　経済論集（大東文化大経済学会）五二

心は形に現わしてこそ—石田梅岩の「石門心学」と礼儀について　今中寛司　日本及日本人一六〇二

近世日本漁民倫理思想の展開　布川清司　文化学年報（神戸大院文化）一〇

織田信長の自己神格化と津嶋牛頭天王　赤木妙子　史学六〇—一

東照宮信仰の地域的展開とその限界—相模国足柄下郡今井村の陣馬跡東照宮を事例として　中野光浩　駒沢史学四三

山王一実神道の展開—乗因を対象として　曽根原理　神道宗教一四三

岡山藩の神道請制度　圭室文雄　『神道講座二　神道の展開』

総論—伊勢参宮と民衆の宗教意識	圭室文雄	『神道講座二 神道の展開』	地方史研究 四一—五
琉球におけるキリシタン禁制	村井早苗	〃	〃
日本キリシタン土着化論	宮崎賢太郎	朝尾直弘編『世界史のなかの近世』〈日本の近世1〉（中央公論社）	〃
近世民衆仏教の形成	大桑斉	前田恵学博士頌寿記念会編『前田恵学博士頌寿記念仏教文化学論集』（山喜房仏書林）	仏教史学研究 三三—二
近世民衆における宗教の存在意義	布川清司	〃	〃 三四—二
近世仏教の歴史像—大桑斉氏の「反論」によせて	奥本武裕	人文学報（東京都立大）	二二五
浅井了意の仏教思想	前田一郎	印度学仏教学研究	四〇—一
元禄聖者譚	高田衛	〃	三九—二
白隠の身心論	笠井哲	紀要（帝塚山大教養）	二八
近世に於ける遊行の陰陽師	菊池武	研究年報（東北大附属図書館）	二四
慈雲尊者—二—筆跡・生涯・思想	木南卓一		
安楽律をめぐる論争—宝暦八年安楽律廃止に到るまで	曽根原理		
良寛における仏教と詩歌—「風流」の語をめぐる一考察	伊藤博之	成城国文学論集	二一
良寛和尚小伝—その生涯と禅と芸術	田熊信之	紀要（武蔵野女子大）	二六
近世文学に現われた異国像	日野龍夫	『世界史のなかの近世』	
徳川光圀と万葉集—長流・契沖との交流を中心に	梶山孝夫	芸林	四〇—三
無の見—上田秋成の仏教観	吉江久弥	近世文芸	五四
「日本の僧定心の事」に見る馬琴の「日本（やまと）」意識	服部仁	〃	五三
幕藩制国家の外交儀礼と琉球—東照宮儀礼を中心に	真栄平房昭	歴史学研究	六二〇
近世朝幕関係の転換—大政委任論・王臣論の成立	藤田覚	歴史評論	五〇〇
富士講取締令の研究	木野主計	大倉山論集	二九
檄文の思想を探る—天人相関説・革命論・割記・建議書	向江強	大塩研究	三〇
異国船打払令復活評議の背景—阿部正弘政権内部の対外認識構造の相違と対立	浜屋雅軌	社会文化史学	二七
村田清風の洋学観—幕末期長州藩藩政改革との関連で	小川亜弥子	史学研究	一九一
近世後期における対外観と「国民」	池内敏	日本史研究	三四四
一八世紀広島藩の孝義者の表彰	鈴木幸夫	紀要（安田女子大）	一九

江戸柳生の思想史的研究　赤羽根龍男　紀要（湘南短大）二―一

高埜利彦著『近世日本の国家権力と宗教』　大桑斉　日本史研究三四二

辻本雅史著『近世教育思想史の研究』　平石直昭　〃三四七

辻本雅史著『近世教育思想史の研究』　沖田行司　日本思想史学二三

洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』　横山伊徳　日蘭学会会誌一六―一

補遺

林羅山の老子観の推移　大野出　日本文化研究二

新井白石と「古代」　中村春作　中国古典研究三五

松宮観山の思想とその影響―附翻刻宮城県図書館青柳文庫蔵「閑窓随筆」　前田勉　研究年報（東北大附属図書館）二三

江戸時代の教育と湯島聖堂　橋本昭彦　斯文九九

近世における地域文化形成の類型的考察―実学を手掛かりとして　末中哲夫　紀要（早稲田大院教育）一

幕末長州藩における洋学の受容とその基盤　小川亜弥子　教育学研究紀要（中国四国教育学会）三四

近代

近代成立期中間層の思想形成について―開化的教導と国家意識を中心に　鶴巻孝雄　歴史評論四九九

近代日本のアジア認識―脱アジア主義とアジア主義　朴英宰　コリアナ四―四

近代日本における文化受容の諸問題―その基礎的考察　西川長夫　立命館言語文化研究二―五・六

日本の宗教伝統と近代の袋小路　ロバート・N・ベラー（島薗進訳）　思想八〇三

日本の近代化と欧米の社会学思想―日本の精神的近代化過程の一側面　富永健一　〃八〇八

反近代思想の史的展開―ヨーロッパと日本　多田真鋤　紀要（横浜商科大）七

天皇制イデオロギーにおける大嘗祭の機能―貞享度の再興より今日まで　宮地正人　歴史評論四九二

近代天皇制国家と〈時間（とき）の習俗〉　今西一　立命館文学五二一

ファシズム期の教員の対外観　栄沢幸二　専修法学論集五四

十五年戦争期の死生観　岩井忠熊　馬原鉄男・掛谷宰平編『近代天皇制国家の社会統合』（文理閣）

「利欲世界」と「公共之政」―横井小楠・元田永孚　苅部直　国家学会雑誌一〇四―一・二

藤波言忠と元田永孚　中野目徹　日本歴史五一八

明治前期の報徳思想と福住正兄―平田派国学との関係を中心に　見城悌治　『近代天皇制国家の社会統合』論集（二松学舎大）三四

山田方谷の門人について　横須賀司久　日本文化史研究一五

西村茂樹の思想と「市民社会」の基礎概念―「文明開化」「自主自由」「権理」について　森一貫

明治期日本の〈西洋哲学史〉移入史　柴田隆行　白山哲学二五

福沢諭吉―近代知識人の生成　川上勉　立命館言語文化研究二―五・六

福沢諭吉と田中萃一郎の歴史観　神山四郎　史学六〇―二・三

福沢諭吉に於ける天賦人権論と天賦能力論―徳育論の基礎としての人間観の分析　長谷川精一　紀要（京都大教育）三七

福沢諭吉と教育勅語　小泉仰　福沢諭吉年鑑一八

中江兆民研究序説―『民約訳解』を中心に　原泰　国史学研究一七

中江兆民『民約訳解』の漢文訳をめぐって　山田博雄　研究年報（中央大院法学）二〇

西周と中江兆民における東西思想の出会い―とくに「自由」の概念を中心として　片山寿昭　徐水生　人文学（同志社大人文学会）一五一

G・ビゴーと中江兆民との接点―時局風刺雑誌『トバエ』考　清水勲　歴史と地理四二七

植木枝盛の思想　内藤辰郎　会報（日本思想史研究会）九

明治憲法の制定と陸羯南―陸羯南の立憲政論に関する覚え書き　本田逸夫　研究報告（九州工業大人文・社会科学）三九

陸羯南の名望家自治論―法史学の課題を求めて　石川一三夫　法制史研究四〇

天野為之の明治後期の経済教育論　市川孝正　早稲田大学史紀要二三

新渡戸稲造の教育思想　松川成夫　紀要（東京女子大比較文化研）五二

わが国「国際化」推進の先駆者たち1―新渡戸稲造のこと　松隈清　紀要（社会文化研）二九

新島襄ノート―徳富蘇峰の新島像　露口卓也　日本思想史学二三

徳富蘇峰と山路愛山―その影響関係について　槙林滉二　紀要（広島女子大文）二六

依田学海と徳富蘇峰　高野静子　日本歴史五二〇

徳富蘇峰の「アジア主義」　中村尚美　社会科学討究（早稲田大社会科学研）一〇八

日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について　柴崎力栄　紀要（大阪工大）三六―一

穂積八束天皇国体論の一考察　間宮正平　論集（京都産業大）二〇―一

木下尚江にとっての田中正造　清水靖久　法政研究（九州大）五七―四

地域研究としての植民政策―矢内原忠雄におけるオリエンタリズム　田中和男　社会科学（同志社大人文科学研）四七

近代日本における「当為空間」から「存在空間」への「意味」の転成―一四　宇治琢美　学報（天理大）一六八

家族国家観による「国民道徳」の形成過程―三・四　三井須美子　研究紀要（都留文科大）三四・三五

「国語」イデオロギーの形成と近代天皇制国家―日清戦後の国語国字論をめぐって　長志珠絵　馬原鉄男・掛谷宰平編『近代天皇制国家の社会統合』（文理閣）

西村天因と朝張之洞の『勧学篇』　陶徳民　懐徳　六〇

福井県における大正自由教育の研究―研究の整理と若干の問題提起　森透　紀要（福井大教育学部第四部教育科学）四二

学校無用論と教育運動―下中弥三郎と江渡狩嶺を中心に　三原容子　日本の教育史学　三四

御真影神格化の過程―「奉護」施設の変遷を中心に　小野雅章　〃　〃

戦前公民科における体制的危機認識―日本におけるファシズムと公民科　松野修　〃　〃

西田幾多郎の思想における「純粋経験」と言葉の問題（英文）　上田閑照　紀要（禅文化研）一七

西田幾多郎の生命観　田路慧　研究紀要（岡山県立短大）三四

純粋経験と自覚と場所　上田閑照　紀要（禅文化研）一七

Spirituality（霊性）―近代日本哲学と鈴木大拙　浮田雄一　社会科学討究（早稲田大限記念社会科学研）三七―一

弁証法の歴史的散見―十一―田辺哲学の弁証法―三　小野誠二　学園論集　六八

和辻倫理学における文化相対主義について　荒井正雄　研究紀要（岡崎女子短大）二四

三木清の社会科学摂取の問題像　内田弘　論集（専修経済学）二五―二

戦後改革における宗教教育と信教の自由―二　鈴木美南子　紀要（フェリス女学院大文）二六

幕末・明治期におけるキリスト教日本伝道の問題―異文化理解の視点から　川村覚昭　論集（京都産業大）二一―二

明治初期の「小寄講」におけるキリスト教防禦運動について―広島県山県郡壬生信順講の場合　児玉識　真宗研究　三五

良寛を敬慕したキリスト者たち　竹中正夫　基督教研究　五二―二

《公会主義》の実態を探る　川村輝典　紀要（東京女大比較文化研）五二

明治二十年代の民衆宗教―金光教に見る「民衆宗教」から「教派神道」への転向　桂島宣弘　『近代天皇制国家の社会統合』

民衆宗教史論の問題―桂島宣弘氏の研究をめぐって　神田秀雄　会報（日本思想史研究会）九
明治初年尾張藩真宗寺院の護法運動　小島恵昭　真宗研究　三五
明治期曹洞宗における宗教運動　深瀬俊路　印度学仏教学研究　三九―二
清沢満之の万物一体論〈近代〉と民衆―丸山教を素材とした一試論　安富信哉　親鸞教学　五八
奥武則
終末論的宗教運動の挫折と変容―ほんみち以降の天理教系教団　弓山達也　紀要（国学院大日本文化研）六七
「初期大本の研究」―出口なおの宗教集団の形成過程　中野秀夫　研究紀要（京都精華学園）二九
明治・大正前期の神社合祀―大阪府旧河内国の場合　関口靖之　日本文化史研究　一五
国の宗教政策と村の神々―四条村・大字四条の場合　井戸田博史　〃
近代宗教史における神道国教化について　澁谷隆阿　紀要（豊山教学大会）一九
神祇院編「明治三九年当時ニ於ケル神社合併ニ関スル法令、訓令、通牒類」　桜井治男　紀要（皇学館大）二九
神道指令と靖国神社・護国神社　大原康男　紀要（国学院大日本文化研）六八
昭和期曹洞宗における鈴木天山禅師の位置　川口高風　紀要（愛知学院大教養）三八―三
敗戦と世直し―璽宇（じう）の千年王国思想と運動―　対馬路人　紀要（関西学院大社会）六三
鷗外と洋学者　巳野保嘉治　科学／人間（関東学院大工）二〇
大正期のトルストイ受容―仏教の土壌の中で　柳富子　比較文学年誌　二七
旧幕臣の明治維新―近代官僚の原型・杉浦譲の構想とエートス　五十嵐暁郎　思想　八〇〇
北陸巡行と民衆統治―天皇像の形成と関わって（上）（下）　滝沢繁　新潟史学　二四・二六
地方の陵墓伝承と明治政府―明治四年二月の「太政官布告」をめぐって　外池昇　調布日本文化一
「家」と家憲―明治期における家規範と国家規範　米村千代　社会科学ジャーナル　三〇―一
小野梓の初期政治思想―留学前後　荻原隆　論集（名古屋学院大人文・自然科学）二七―二
明治前半期の義民顕彰運動―津軽の義民・藤田民次郎を事例にして　佐藤公英　国史研究（弘前大）九〇
伊藤博文とアジア―対清認識及びその対応策を中心として　林敏　史学研究一九一
日本におけるドイツ的「法治国」概念の継受（二）―「法治国」観に関する学説と俗説　高田敏　阪大法学　一五七・一五八

坂本直寛（南海男）における自由民権思想の形成―立志学舎における政治教育　千葉昌弘　研究報告（高知大教育学部）第一部　四三

玄洋社の成立時期について　森山誠一　〃　論集（金沢経済大）二五―一

玄洋社の成立時期について―続―初期「玄洋社」再考―上　竹田和夫　〃

明治一七～一八年の民衆運動について（一）―要求・行動形態・理念を中心に　高木博志　社会科研究（新潟県高等学校教育研）二九

近代天皇制の文化的統合―立憲国家形成期の文化財保護行政　岩井忠熊　『近代天皇制国家の社会統合』

西園寺公望の異文化受容―尊攘派公家から西欧型リベラリストへの転身　丸山雍成　立命館言語文化研究二―五・六

明治の地方政治家―その『上陳書』にみる思想と行動　清水元　史淵　一二八

明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型―志賀重昂「南洋時事」をめぐって―　見城悌治　アジア経済　三二―九

報徳二宮神社創建考　犬塚孝明　立命館文学　五二一

寺島宗則の外交思想―自主外交の論理とその展開　長志珠絵　日本歴史五一五

青年団イデオローグ山本瀧之助に関する一考察　小林仁美　歴史評論四九四

日露戦後における留岡幸助の思想と行動―地方改良事業・感化救済事業に対する主体的意図　井上薫　キリスト教社会問題研究　三九

韓国統監府設置前後の公立普通学校体制形成と日本語普及政策　逆井孝仁　日本の教育史学　三四

河上肇における日本経済思想史研究　富田宏治　立教経済学研究　四四―四

倫理的主体性の政治像―大山郁夫の政治思想についての一考察―三　梅森直之　法と政治　四二―一

大杉栄における「社会」と「自我」―「社会的個人主義」への道程　鈴木良　早稲田政治経済学雑誌　三〇四・三〇五

水平社創立について　辻本弘明　『近代天皇制国家の社会統合』

「大正デモクラシー」の崩壊に関する研究序説　野村乙二朗　紀要（奈良大）一九

石原莞爾における国体論の意義　蔵田雅彦　政治経済史学　三〇〇

天皇制国家の朝鮮植民地支配と文化・宗教政策　宮田節子　論文集（朝鮮史研究会）二九

皇民化政策の構造　山本有造　〃

日本における植民地統治思想の展開（Ⅰ）（Ⅱ）―「六三問題」・「日韓問題」・「文化政治」・「皇民化政策」　アジア経済　三二―一・二

植民地教育と異文化認識―「呉鳳伝説」の変容過程　駒込武　思想　八〇二

天皇制教育と儀式の位相―日の丸と学校儀式をめぐって　森川輝紀　歴史学研究　六二〇

「満州国」の法と政治―序説　山室信一　人文学報　六八

戦時期の鈴木安蔵の言動―「ファシズム」批判と「転向」　竹中佳彦　筑波法政　一四

麻生久の思想について―戦時天皇制にかんする一試論　伊藤晃　研究報告（千葉工業大人文）二八

山川均の「民主革命」論と民主人民連盟　洪仁淑　大原社会問題研究所雑誌三九三

占領期における戦争責任論　吉田裕　一橋論叢一〇五―二

象徴天皇制と戦後責任―克服されるべき「戦争責任」論　尹健次　歴史学研究六一七

「輔弼」をめぐる論争―家永三郎・永井和往復書簡　家永三郎　永井和　立命館文学五二一

象徴天皇制と民衆意識―その思想的連関を中心に　安田常雄　歴史学研究六二一

天皇の「代替わり」と戦後天皇制研究の課題　広川禎秀　歴史評論五〇〇

二つの天皇制度と立憲制　横田耕一　歴史学研究六二六

和田守著『近代日本と徳富蘇峰』　梶田明宏　史学雑誌一〇〇―二

谷川稔他著『規範としての文化―文化統合の近代史』　上垣豊　史林七四―一

『幼学綱要』に関する研究―明治前期徳育政策史上における意味の検討　矢治佑起　日本の教育史学三三

デフォウと初期社会主義者達―明治期を中心に　岡崎一　初期社会主義研究四

河上肇における「唯物史観」解釈の変遷過程　小林漢二　論集（松山大）二―五

石川三四郎の「土民思想」　平島敏幸　研究年報（学習院大文）三七

補遺

中国語キリスト教書の流入と仏教界の対応―幕末・明治初年を中心として　吉田實　仏教史学研究三二―一

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年の春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳蠲をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士、博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を発刊し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

日本思想史研究　第二十六号

平成六年三月十五日　印刷
平成六年三月二十五日　発行

編集代表者　玉懸博之

印刷所　仙台市宮城野区日の出町二丁目四－二　㈱仙台共同印刷

発行所　仙台市青葉区川内　東北大学文学部　日本思想史学研究室